

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4393100021		
法人名	社会福祉法人 御薬園		
事業所名	グループホーム 桜の里		
所在地	熊本県唐津郡水上村岩野2658-1		
自己評価作成日	令和4年2月13日	評価結果市町村受理日	令和4年5月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺3丁目15-1
訪問調査日	令和4年3月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

日常生活の中で自分で出来る事をしながら個々の身体機能が維持出来る様に支援して、それぞれの能力に応じた役割を果たす事で生きがいを感じて頂いている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

職員は「ゆったりとした時間の中で自分らしく楽しみながらの生活」「自分でできることをやれる喜びと共にそれを喜べる暮らしを」の2つの理念を共有しており、入居者が興味を持ってできることを探すため、日常での気づきやいくつかのチャレンジによって、漢字の書き取り、新聞や本を読むこと、ナンプレ、お盆拭きや茶わん洗いなど、入居者の好きな、継続して取り組めることを見出している。介護計画作成にあたって、今できることをできるだけ長く維持していけるための計画とすることをポイントに、理念の実践に繋げている。家庭の自分の部屋のように、しっかりと馴染んで温かい雰囲気がかかる居室が見られ、過ごしやすい部屋作りの工夫に家族や職員の愛情が感じられた。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念を作り、職員全体で共有し、実践につなげられるように努めている。また、理念を掲示し、利用者家族にも当事業所の介護に対する方針が伝わるようにしている。	「ゆったりとした時間の中で自分らしく楽しみながらの生活」「自分でできることをやれる喜びと共にそれを喜べる暮らしを」の二つをホームの理念とし、玄関に掲示している。職員は理念を共有し、入居者が好きなことを見つけて楽しみながら暮らせるよう、支援している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナウイルスの流行や職員不足の為ほとんど出来ていない。	すぐ近くに小学校があり、コロナ禍以前は運動会やミカン狩りなどに招待されて出かけた。村の文化祭の見学や傾聴ボランティアの来訪など、地域との交流が行われていたが、現在は中止している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域へ出る事も難しく活かせていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現状のサービス提供状況や活動内容を伝え、参加されている委員の方々から意見を頂いている。	運営推進会議は、今年度はコロナの状況を見ながら、可能な場合は対面での会議を開催し、出来ないときは委員に資料を送付して会議に代えている。	時には、協議したいテーマを設定し、テーマに沿ってゲスト委員を呼び、話をしてもらったり協議するのも良いと思われる。なお、資料には活動状況の記載や、写真には日付や簡単なコメントの記載も期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃から密に連絡を取れてはいないが、運営推進会議には毎回出席して頂いており、関係は維持出来ている。質問等があれば電話して対応して頂いている。	運営推進会議には、ホームの指定市町村である4町村の担当者の参加を得、ホームの情報を伝えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	1名が同法人の身体拘束委員会の委員になっており、毎月現状報告を行っている。また法人での合同の研修会にも交代で参加している。玄関は防犯の為に夜間は施錠するようにしている。	法人の身体拘束廃止委員会では、各事業所の現状報告と意見交換が行われており、ホームからも見守りセンサーの使用について報告している。また、年2回研修会が行われており、身体拘束のないケアについて意識の浸透を図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人でマニュアルを作成し、管理者が高齢者虐待防止委員会の委員となっている。また法人内での研修に参加し学ぶ機会を設けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している	権利擁護について、職員全員が理解し活用出来ているとは言えず、成年後見人制度を利用している入居者も今は居ないので学ぶ機会は少ない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時の書類も多く、専門用語もある為、かみ砕いて説明するようにしており、疑問等あれば、聞いて頂く様に話をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者の意見等は、日々の会話の中で直接聞き取りをしている。ご家族に対しては、電話をした際に現状報告と共に聞き取りをするようにし、施設の広報誌を送付する際には、担当者がコメントを書く様にしている。	家族の意見・要望等は、電話や窓越し面会に来られた際に聞き取るようにしている。年4回発行される「さくら通信」を送付する際は、担当者がコメントを書き添え、近況を伝えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員が集まって話をする事が難しい為、日々の業務の中で意見を出したり、申し送りをして意思統一を図っている。法人で対応する必要があるならば、毎月の運営会議で意見を出している。	朝・夕の申し送り時や業務の中で、情報交換・意見交換を行っている。ケアに関する提案はまずやってみて、うまくいかないところは改善しながら業務に反映している。意見交換の内容はノートに記録するとともに、ラインでも共有して把握の漏れがないよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎年3月に人事考課を実施し、職員個々の勤務評価を行い、その考課結果により処遇改善に反映させ、職員各自の勤労意欲の向上を図るとともに、働きやすい職場環境づくりを職員自ら考え改善できるよう委員会活動等で取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	現場での実務研修や月例の施設内研修の他、職員の経験年数及び業務のスキルの状況を把握し、法人外で実施されるそれぞれの職員に見合った研修を選定し受講させるなど、年次計画で職員の育成を図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣市町村の同業者で組織された任意の団体に加盟しているが、新型コロナウイルス感染症の影響で勉強会や研修大会等を実施できていない状況であり、同業者との交流がなかなかできていない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	各入居者に担当者を1名付け、その職員がその方の窓口になり自ら責任をもって関り、信頼して頂けるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約時に現状と今後の不安の聞き取りを行い、入居後しばらくは施設での生活の様子を報告するようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前に、趣味やどのような生活をしてきたのか聞き取りをし、施設でどのように生活したいか伺うようにしている。また、入居後に要望等あれば家族に相談し対応するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	各入居者の能力に応じて、家事への参加をして頂いており、一部の入居者は、自分の役割だと思っておられる。介護度も高くなってきており、全員がそうなる事は難しい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時には、家族に近況を報告し、何かあれば電話でも相談している。また、受診等家族が出来る事は依頼し、関係性が途切れない様にしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナウイルスの流行の為外出したり、外部の方との接触はほとんどしていない。	コロナ禍以前は、入居前のご近所の方が訪ねて来られたり、家族の協力を得て盆・正月の帰省やお墓参り等で自宅に帰る支援も行っていたが、現在は電話での関係継続が主となっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	関係性を把握し、食堂の席を決めている。また難聴の方も多く、職員が間に入り意思疎通が出来る様に努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	令和2年5月以降は退居された方はおらず、最期の退去者も亡くなられているので、現状では退居された方の相談や支援はしていない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居時に、どのような暮らしをしてきたのか家族にも聞き取りをし、どのような生活をするかの参考にしている。また、入居後は本人の訴えを聞きながらどのような事が出来るのか検討している。	共に生活する中で、入居者一人ひとりの好きなこと、できることなどを探し出し、少しでも楽しく喜びを持って生活できるよう努めている。漢字を書くことが好きな人、本が好きな人、茶わん洗いやお盆拭きなどのお手伝いができる人などが、生き生きと活動している様子が見られた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に、本人やケアマネを交え調査を行っており、家族へも聞き取りをしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	施設での生活歴も長くなり、それぞれの現状把握は出来ている。能力ややる気に応じて家事の手伝いをして頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	高齢の方も多く、一部の方は認知症の度合いも高い為、入居者全員の意向を完全に聞き取る事は難しい。家族とは不定期ではあるが、電話連絡し、現状を伝える。	ケアマネが毎月モニタリングを実施し、計画の見直しは半年ごとに行っている。現状と課題を整理し、面会時や電話で家族の意向を確認して計画案を作成し、担当者会議で他職員の意見を聞き、完成している。今できることをできるだけ長く維持していけるような計画となるよう心掛けている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員全員が、介護記録を記入する機会があり、その時に気付いた事があれば申し送りをして、その都度見直しや改善に取り組んでいる。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時の状況に応じて対応するようにしているが、現状ではサービスの多機能化には取り組めていない。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現状では地域に出る事は無く、個々の能力を活かし施設での生活を安全に送れる様にしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	法人系列の病院に受診される方が多い。また、入居前から専門医に受診されている方もあり、受診時には付き添いし、情報提供している。特変があれば、その都度家族への連絡をしている。	かかりつけ医は本人・家族の希望に沿い、多くは近くの系列医院とし、職員同行で月1回受診している。他の病院受診にあたっては、同行や送迎など支援を行っている。週1回、訪問看護師が訪れ、全員のバイタルチェックなどで健康管理を行っている。また、隣接する特養の看護師とも連携が図られている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎週訪問看護師が来る為、その際に気になる事は相談している。また、急を要する場合は、事後報告で受診結果を伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	現状では、病院に赴く事は無く、電話やFAXでのやり取りのみをしている。以前の様に顔を合わせて話すのは退院時のカンファレンス程度である。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化してきた場合は、特養等への入所を勧めており、看取りを行う方針ではない。	ホームでの看取りは行わない方針であり、家族にはホームでできる範囲について説明し、介護度が3以上になったら隣接の特養に入所申込みを促すこととしている。特養の相談員とは毎月1回、話し合う機会があり、状況報告をして連携を図っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急救命講習は法人全体で毎年研修を行っているが、今年度はコロナの流行もあり実施していない。マニュアルを作成しているが、実践力は身に付いているとは言い難い。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回避難訓練を実施しているが、実際に避難するのは火災時のみだと思われる。地域消防団を含め避難訓練を実施するのが望ましいが、未だに出来ていない。	年2回、ホーム単独で、日中・夜間を想定した避難訓練を行っている。訓練では入居者は特養の玄関まで避難しており、特養との連携が図られている。	管理者は消防団との連携を図りたいと考えている。運営推進会議で災害対策をテーマとして消防団の方に来てもらい、ホーム内部の配置の確認や話をしてもらったり、意見交換をするのも良いと思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その方々の性格もあるが、皆年長者という事を念頭に対応をしている。	特に排泄介助の場面では、介助してもらうことに気兼ねしたり、恥ずかしく思われないように、気にしなくていいですよと優しい言葉掛けをするよう配慮している。入室の際は必ずノックして名前を呼んで入室し、年長者への尊重の気持ちを持って対応することを心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一部の方は自己決定をする事が難しいが、やりたい事は、その時に出来る様にサポートするようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事の時間や入浴日は決まっているが、その他の時間はそれぞれのやりたい事をして過ごして頂いている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	化粧品を使う方は個人で持って頂いており、朝起きた際に身だしなみを整える様にしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	下準備などの簡単な事はして頂いており、片付けは特定の入居者が専属で行われている。食事も見守りしながら一緒に食べる様にしている。	母体特養の栄養士が作成したメニューにより、調理されたものやホームで調理する食材が系列の会社から毎日届けられている。季節に応じた行事食が出され、誕生日は手作りケーキでお祝いしている。できることに応じて、もやしの根切り、食器洗い、お盆拭きなど、いきいきと行う入居者の姿が見られた。	ホームの職員は入居者と同じ食事を食べていないとの事であり、一人でも同じ食事を摂ることで入居者との会話も広がると思われる。また、味・硬さ・食べ易さなどの気づきを食事に反映するため、伝えていくことも必要と思われた。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	それぞれの食べる量を把握し食事を提供している。何名かは水分量が少ない為、こまめに声掛けし摂取して頂いている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは出来ていないが、起床時、就寝前には口腔ケアを行い、夜間に洗浄剤を使い義歯の消毒をしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	失禁の多い方や自らトイレに行かない方には、声掛けし、排泄を促す様にしている。	日中は排泄が自立している方の他、多くの方は声掛けしトイレ誘導して自立支援に努めている。夜間はトイレ誘導の方、ポータブルトイレ使用の方、夜用のパットに代えてゆっくり休んでもらう方など、一人ひとりの状態に合わせた支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量が少ない方は、その方が好んで飲む物を提供し、摂取量を増やす様にしている。ストーマ造設された方もいるので、その方は特に注意して便の性状を観察している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴日は決めており、人より先に入りたい方も分かっているので、その方から入浴して頂いている。その他の方は、その時の体調や気分を見ながら入浴の声掛けをしている。	入浴は基本、週2回実施している。一番風呂が好きな人や長湯が好きな人など、希望に沿って対応している。自分で浴槽に入れない人も、介助で浴槽に入ってもらい、脱衣までが嫌いな人も、お湯に入ったら長湯になる方もおり、できるだけ気持ちの良い入浴となるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中自分で居室へ戻る方が多く、昼寝される方は、昼夜逆転しない様に声掛けしている。夕食後はそれぞれ思い立った時間に就寝に動かれる為、その時に対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	現状安定しており、内服薬の変更は少ない。変更時には申し送りをして、観察項目を次回受診時に医師に報告している。また、訪問看護師へも訪問時に状態と服薬変更を伝えている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一部の方は残存機能を活かし役割を持って生活出来ているが、全員が何か役割を持ち、楽しんで生活出来ているとは言えない。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現状では屋外に行く事は難しい状態。コロナまん延による面会の制限もあり家族への協力も出来ない。	コロナ禍の影響と職員不足で、外出支援はほとんどできていない状況である。	コロナが収束した際には、家族の協力も得て外出支援の取組を期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望者には家族へ施設側では管理しない事を伝え、少額を渡すように伝えている。買い物は職員に頼まれ、それを買って渡す様にしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の希望があった場合には、職員が対応し電話して頂いている。今は手紙を書かれる方はいない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間においては、毎日掃除をして、清潔に使う事が出来る様に心掛けている。廊下の壁にはその季節の飾り付けをする様にしている。	日中、リビングで過ごす入居者の様子は、対面式のキッチンから見守りし易い造りになっている。廊下の壁にはお雛様や春の花など手作りの飾りを貼って春の雰囲気伝えていた。テーブルで漢字を書く人、テーブルに伏せている人、小上がりの畳の間で洗濯物を畳む人、テレビを見る人など、それぞれ自由に過ごしている姿が見られた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	独りになれる場所は少ない。食堂では気の合う方が隣になるように席を配置している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室にはベッドしかない為、入居時に本人が使っていた物を持って来て頂く様にしている。入居後に本人に聞きながら生活しやすい様に家具の配置を変更をしている。	居室には、タンス・衣装掛け・テレビ・テーブル・椅子など、馴染みの物・必要な物が持ち込まれ、誕生日の色紙やぬいぐるみなどが飾られている。じゅうたんを敷き、テレビが見やすい位置にテーブルや椅子を配置して、家庭の自分の部屋のように、しっかりと馴染んで温かい雰囲気が伝わる居室が見られ、家族や職員の愛情が感じられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	屋内はフラットな作りである為、移動は出来るだけ自分でして頂く様にしている。それぞれの出来ない事がある為、能力に合わせてサポートしている。		